

報徳博物館

No.4
通算 No.111



だより



ハッサム金次郎王子④
明治天皇ご愛賞の少年金次郎
銅像(岡崎雪聲・作)



2階常設展示室 リニューアルオープン直後の日

報徳博物館展示リニューアルで一新 — 明治天皇ご愛賞「金次郎像」も特別出陳 —

報徳博物館の2階常設展示室が、ヴァジュアルにイメージ新、2019(令和元)年7月21日にオープンしました。館内照明のメンテナンスも含め、1983(昭和58)年の開館以来36年ぶりの改装です。これを機会に、明治天皇が執務室机上でご愛賞された岡崎雪聲作「二宮金次郎像」を、新規会館準備中の明治神宮ミュージアムから特別出陳(～9月16日)していただきました。合わせて地階展示室において、報徳二宮神社創建125周年を記念して、神社と報徳博物館所蔵のコレクションによる「二宮金次郎像特別展」(絵画21点、彫像34点、計55点)も開催しました。また岡本秋暉画「二宮尊徳坐像」の原画拡大複製パネルも、2階で常設展示されています。

絵本の挿絵原画・絵画・写真でいざなう 報徳世界

—リニユール展示の見どころ—

《壁面の展示構成》

大別すると次の三つのテーマに分けられています。1「二宮金次郎の生涯とその実績」2「尊徳の子孫と弟子たち—幕末から明治—」3「現代につながる報徳」。

1は絵本の挿絵原画を活用した金次郎の生涯と報徳仕法の成り立ち、報徳仕法による貧困社会の救済と再建の因果の物語です。2と3は、報徳の近世から近代への伝達と、近現代社会において、それぞれの立場で報徳の継承、普及、奨励に尽力してきた人々の紹介となっています。



1 二宮金次郎の生涯と実績

この項は次の四期に分けられます。第一期は誕生地足柄平野栢山村の幼少年時代・「生い立ち、苦難と再起の伝説—足柄平野・栢山村時代—」です。金次郎が幼少期に酒匂川の氾濫で田畑を失い一家没落、それを試練として勤労と工夫、生産性を高める努力によって自家再興を達成するまでの、伝説的な自立の物語です。第二期は「身分を超えた信任—小田原城下の時代—」です。小田原藩家老服部家の若党として仕える内、借財に苦しむ服部家や藩士を窮乏から救い、斗升の改正で年貢の公正を定め、藩主大久保忠真の信任を得て大きな飛躍を遂げた青年時代です。次いで第三期は、小田原藩の役人として、荒廃した大久保分



桜町領の農民を指導する金次郎(小島直画)

家宇津氏の下野国(栃木県)4千石の桜町領を、自身の体験を生かした復興の道筋「報徳仕法」によって再建し、さらに創価では窮民の救済にも活躍した壮年期時代。そして幕府の官吏として、永安社会の実現に向けて報徳仕法の体系的、普遍的な指導書を完成し、困窮した幕府領日光神領の再生と人材育成にもあたった晩年の第四期です。後半生の三・四期をまとめて「永安社会への道—下野国桜町・日光の時代—」としています。

2・3 近世から近現代へ、報徳継承の人脈

報徳の近現代への継承は人から人へ、生産の現場を通じて、あるいは報徳思想と実践の普及活動によって進められてきました。「尊徳の子



富田高慶『報徳記』初版本

孫と弟子たち—幕末から明治—」「現代につながる報徳」は、報徳の普及や支援に力預かった人々の肖像画と写真による紹介です。尊徳の生涯を初めて紹介した『報徳記』や、尊徳の言説を記した『二宮翁夜話』『二宮先生語録』などの初版本や初期の著書も併せて展示されています。

小島画伯の絵本の挿絵で実感

今回の展示替えの最も大きな特色の一つが、出版当時大変評判となった、日本画家小島直氏^{なおし}が手がけた『えほん きんじろう』(1980年刊)の挿絵の活用です。小島画伯は小田原出身、足柄小学校、東京美術学校卒で、金次郎と同郷の足柄、小田原の風土景観を味わい深く描いています。挿絵は尊徳生誕二百年記念の映画『東西南北〇に候^{まう}一二宮尊徳の世界一』(1987年)にも活用されましたが、この時新たに数シーンの絵が追加され、原画は合わせて35点になりました。映画完成翌年に小島画伯からその全てを報徳博物館が寄贈を受けました。この度の展示替えでその大半がパネルに拡大複製され、「二宮金次郎の生涯と業績」の壁面を飾ることになりました。

なり、折々表御座所に飾ってご愛賞されました(昭和16年東京美術学校)ペンソット解説)。大正10(1921)年の明治神宮宝物殿完成時に、同館に奉納、保管されました。その後昭和初期から小学校を中心に日本中に普及した「負薪読書金次郎像」形式のモデルとなりました。



御物「銅像二宮金次郎(負薪読書)」J1910(明治43)1891年

ルとなりました。

昭和3年昭和天皇ご大典記念に、神戸の中村直吉氏夫妻が地元神戸と明石、生誕地小田原の小学校に計84体の金次郎銅像を寄贈したことは、当博物館だより第2号で紹介しましたが、彫像を委託された慶寺丹長氏^{ひやしだんちやう}は、この御物を参考にしたと伝えられています。

静岡県掛川市では、昭和63年(1988)3月13日の新幹線掛川駅開業を記念して、北口広場に金次郎像を設置しました。同市の大日本報徳社と掛川経済懇話会が共同発案し、全国から寄付金を募って寄贈したものです。当時生涯学習を提唱していた榛村純一市長(後の同報徳社社長)は、金次郎像を「労働と学問は同じこと」を体現したものと評価し、その像形は御物をモデルにしました。同県島田市の彫刻家松田裕康氏に制作を依頼した少年等身大像高140cmの精緻な模刻複製です。その同型レプリカが大日本報徳社大講堂にもあります。



若き日の金次郎活躍の舞台 小田原城下町

ハナム金次郎シリーズ④

明治天皇ご愛賞「負薪読書金次郎像」

明治神宮ミュージアム(前明治神宮宝物殿)の御物「銅像二宮金次郎」は、2階展示室の正面に岡本秋暉画『二宮尊徳坐像』と共に展示されました。明治43(1910)年9月開催の東京彫工会に彫金家岡崎雪聲^{せつせい}が負薪読書の金次郎銅像(像高45.5cm)を出品。ご覧になった明治天皇がこれをお買い上げに

二宮金次郎の彫像、画像コレクション選特別展(地下展示場)

地階の展示室において開催された報徳二宮神社と報徳博物館所蔵の「二宮金次郎像特別展」は、令和2年10月5日までの長期にわたりました。絵画21点は日本画系の軸装、額装、色紙等が中心です。その中には明治26年刊の幸田露伴著『二宮尊徳翁』の口絵を版画で飾った著名日本画家小林清親の肉筆画軸装(馬曳き読書)の図や、水戸徳川家



地下展示室のコレクション選特別展

旧蔵の木村莊八画<二宮尊徳像>などは興味をそそる話題作でしょう。

また、彫像34点は、銅製、鉄製、木製、陶製と材質は様々ですが、いずれも座敷や玄関の棚、書斎の机などに飾られる愛賞用の置物が主体です。その中には、御物金次郎像を製作した岡崎雪聲が、のちに限定市販用として彫像した「わらじ推譲」姿の金次郎像(28cm)など、これまであまり知られてこなかった作例も含まれています。



小川清親画(馬曳き読書)、岡崎雪聲作(わらじ推譲金次郎像)

業務報告

メンテナンス報告 館内要所の照明装置を一新

展示室のリニューアルに合わせて、報徳博物館内要所の照明装置、配線等も刷新されました。開館以来三十数年そのままの照明環境が時代になぞわらず、6年前に一部LEDの照明を設置しましたが、技術上必ずしも良好な結果が得られず、この度改めて1千万円の経費をもって三菱製器具による大幅設置替えを実施しました。

2階の常設展示室では、ダウンライト30灯、スポットライト40灯、什器照明38本を、地下1階展示室ではダウンライト32灯、スポットライト30灯の設置変更をしました。また展示室以外のロビーや階段の誘導灯もLEDに全面変更したため、全体として格段に明るくなり、これまでやや薄暗かったイメージが払しょくされると共に、相当の節電効果も得られました。

また、防犯器具の一部や監視カメラも新規製品



館内展示室の新設置備モニターの画像

に交換したため、24時間監視、録画も可能となり、セキュリティ態勢も一段と向上しました。

コロナ感染症対応で一時的休館

昨年末頃からの世界的なコロナ感染症の蔓延問題は日本にも急速に波及し、3月28日には政府の緊急事態宣言の発令に至りました。これに対応し当博物館も同日より5月31日まで一時休館となりましたが、6月1日から再開館しています。再開館後は入館時の消毒、発熱検査、三密回避に対処しています。また再開館後は月例行事の「報徳ゼミ」「古文書に親しむ会」「中国を知ろう会」の開催も見合わせてきましたが、9月から「古文書に親しむ会」が、10月からは「報徳ゼミ」「中国を知ろう会」も再開されました。

開館日・開館時間の変更

当博物館は運営業務合理化の都合上、6月1日よりの再開館日に合わせて、開館日と開館時間を下記の通りに変更することになりました。

- **開館日**：毎週4日 土・日・月・火曜日(水・木・金曜日及び祭日代休日、年末年始夏休み、メンテナンス期間は休館となります)
- **開館時間**：9時30分より16時30分まで (入館は16時)

*なお、団体の場合、前もって申し込みがあれば開館対応をいたします。

発行 公益財団法人報徳福運社
報徳博物館

〒250-0013 小田原市南町1-5-72
電話0465(23)1151・振替00230-6-49044